

5歳児の規範意識を育てる保育環境の考察 —レゴコーナーにおけるきまりの習得過程を中心に—

清水 陽子*1・犬童 れい子*2

*1九州女子短期大学 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1

*2小羊保育園 熊本県合志市幾久富1866-858

(2015年11月12日受付、2015年12月17日受理)

キーワード 5歳児 規範意識 保育環境

要 旨

本研究では、柏・田中らの「きまり」習得に関する一連の研究において報告された規範意識の育成における3種類の相互関係を分析の指標として、K保育園のレゴコーナーにおける5歳児の遊びのきまりの習得過程を分析し、幼児がきまりを習得するための環境構成や援助の在り方について考察することを、研究の目的とした。

その結果、保育者が、コーナーを設置した時に子どもの遊び方を様々な視点から予想し、適切な環境構成をすることが、不要な葛藤やいざこざを生むことなく、5歳児が仲良く遊ぶためには効果的であることが検証された。また、子どもがきまりを守れない場面を見つけて、子ども達に話し合いを通して主体的に考えさせたことが、幼児の「きまり」の習得を促し、クラス全体の「きまり」の定着を促したことも明らかになった。つまり、規範①（大人が一方向的にきまりを与える「受動的」タイプ）は、環境構成の初期段階には必要であるが、次第に規範②（他者との関わりの中で与え受容される「同調的」タイプ）が増加し、第2期「きまりを理解し守る時期」になって幼児の変容と育ちが見られるようになると、規範③（「創造的」タイプ）の行為が出現したことが明らかになった。

1. 問題の所在

近年、小1プロブレムという言葉で表現されるように、子どもの学習規律の習得や規範意識の育成が難しくなっている。広辞苑によると、規範とは判断・評価または行為などの拠るべき基準という意味があり、幼児教育における「規範」は、「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける」「友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする」「共同の玩具や用具を大切にし、みんなで使う」等のねらい及び内容が「保育所保育指針」に記されている¹⁾。また、「幼稚園教育要領」には「集団の生活を通して、幼児が人とのかわりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必

要性などに気づき、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること」が保育内容の領域「人間関係の内容の取扱い」に明記されている²⁾。柏・田中らは、「幼稚園のきまりは大人が一方的に与えるものではなく、幼児の生活過程から創られる」との仮説から「幼児が生活の中で経験し、体得したきまりは、生活知として内在され、他の状況においても生かすことができる」ことを検証している。³⁾

本研究では、柏・田中らのきまりの習得に関する研究において提示された規範意識の育成における教師と幼児の3種類の相互関係を分析の指標とした。そして、研究対象としたK保育園のレゴコーナーにおいて、5歳児のきまりに対する変容の姿を担任による実践記録の分析によりとらえ、田中らの論文に引用されていた「集団規範の時相」(Power, C.F.・Higgins, A.・大西頼子・岡田義則訳「正義的共同社会論」)を参考に、3つの時期にわけた。⁴⁾この2つの方法を組み合わせることにより、規範意識の育成に効果的であった援助と環境構成について報告することを、研究の目的とする。

2. 研究の対象および期間・方法

- (1) 対象：熊本県K保育園：4, 5歳児クラス キリンググループ（5歳児）24名
- (2) 期間：2011年4月—2012年2月
- (3) 方法：参与観察およびビデオ記録、実践記録の分析
- (4) 分析の視点：保育者が一方的にきまりを与える「受動的」タイプ、他者との関わりの中で与え受容される「同調的」タイプ、「幼児—幼児—保育者」といった3者間の相互作用により生成される「創造的」タイプの3つのタイプがあることを、田中らは先行研究の検討により示している⁴⁾。本研究では、規範①—保育者が一方的に与える「受動的」タイプ、規範②—他者との関わりの中で与え受容される「同調的」タイプ（保育者の提案から話し合いを始める事例）、規範③—「幼児—幼児—保育者」（子どもの提案から話し合いを始める事例）といった3者間の相互作用により生成される「創造的」タイプの尺度を指標として、レゴコーナーにおける5歳児の遊び方や友達との関わりの様子を、犬童が主任の立場から考察した。実践記録の分析は主に清水が担当した。観察期間は子どもの姿の変容によって、第1期「きまりに気づく時期」、第2期「きまりを理解し守る時期」、第3期「新しいきまりを創り出す時期」の3つに区分した。

3. 研究の結果

第1期「きまりに気づく時期」の概要

5月13日に、工作コーナーとレゴコーナーを設定した。保育者が、コーナーの広さを考慮して一度に入って遊べる人数（定員）と作品の置き場所を、コーナーの入り口に掲示した（規範①大人が一方的に与える「受動的」タイプの事例）。しかし、コーナーに入れず外で待つ

ている子どもが多かったため、まず保育者が解決案としてのきまりを提示し、5歳児と一緒にルールを考えた（規範②他者との関わりの中で与え受容される「同調的」タイプの事例）。

事例1 規範②（「同調的」タイプ）の事例「じゃんけんの理解を通してのT児の育ち」

話し合いの順序として「何人まで入ることができるか」を問いかけた。これは1人が使用できるレゴの量が決めてとなるため、保育者が提案した。子どもがきまりを守ろうとする意識を育てるためには、子ども達が自分の考えを出し合うことが大切と考え、「レゴコーナーのやくそく」を話し合う時を持った。始めは自分に都合のよいきまりを考え、意見をいう子どもが多かった。しばらくして、T児が「ケイドロの時みたいに、じゃんけんで決めるといい！」と戸外でケイドロや、ドッチボールなどの体験を例にあげて意見を出すようになった。他の子どもも納得し、T児の意見に決まった。

【子どもの変容の背景】

朝の集まりの時に、遊びの報告をした後、保育者が提案したきまりについて考え、話し合う時を持った。遊んでいるうちに、もう1人入れる空間になった理由について、子どもからもっと明確な答えが出るように援助した方がよかったと考える。この話し合いは、共有の遊び空間を使う際のきまりを守る意識を育てることにつながった。

T児は昨年までじゃんけんで負けることが嫌でじゃんけんができなかったが、遊びの体験を重ねてじゃんけんに対しての嫌悪感がなくなったと思われる。

第2期「きまりを理解し守る時期」の概要

子ども達がお互いに場を共有して遊ぶことに慣れてきたので、定員数を増やすことを提案した（規範②の事例）。G児の他律から自律への変容の事例から、保育者の励ましの効果と保育者間の連携の重要性が明らかになった（規範②の事例-1）。結果として、子ども達は「交代」のルールについて話し合いができるようになった（規範②の事例-2）。この時期には、他者との関わりの中で受容された「同調的」なタイプ（規範②の事例）が増えた。

事例2 第2期 規範②の事例-1「保育者間の連携による見守りと励ましの効果」

G児は自分の思い通りにならないと、手が出たり、悔しい気持ちを相手が嫌がるような言葉で表現したりする姿が見られていた。G児が主体的に約束を守った瞬間を、他グループのF保育士がちょうど見ており、G児に「よう我慢した！」と声をかけ認めた。そうしたことで、レゴコーナーでのG児の態度が少しずつ変わり始めた。

【子どもの変容の背景】

K保育園では毎日、各クラスの子どもの理解を深めるための報告会を持っている。担当保育士だけでなく、その場に居合わせたF保育士がこの状況を見守り、G児をほめたことを契機に、その後G児は継続的にきまりを守れるように変容した。5歳児は他律から自律へと道

徳的判断が発達する時期であり、他の子どももG児の変容を認めたことから、友達関係が変容したと考えられる。

事例3 第2期 規範②の事例-2 「交代のルールについての話し合い」

子ども達の遊ぶ様子を見てみると、じゃんけんで決めることは平等だが、遊びたいと思う時間に差があるため、難しいことを感じていた。コーナーに入れる人数は限られているため、入れる子どもが増えるように「週のうち2回まで」などの決まりを加えたほうが良いのではと保育者間では話していた。子ども達との話し合いの場で「交代」という言葉が出てきたので、それを取り上げ「1週間で2回まで」という交代のルールの意見を具体化して示すと、子ども達も賛成し、やってみるようになった。

【子どもの変容の背景】

すばやくレゴコーナーに行く子どももいれば行かない子どももいるなど、興味・関心があっても行動の仕方に個人差があることに気づいた。

「1週間に2回まで」のきまりを掲示したことは、一つのルール作りのモデルを示すことになった。

第3期 「新しいきまりを創り出す時期」の概要

5歳児は人気のあるレゴの使用期間と片付けの方法を話し合い、公平な使い方について具体的な意見を伝えることができるようになり、新しいきまりを主体的に創り出す姿がみられた（規範③の事例）。

しかし、子ども達が考えたきまりを実施してみると、片づけができない状況が生じた。そのため、保育者がこのきまりをやめることを子どもに説明した際に、子どもが理解してスムーズに受け入れた（規範①の事例）。

事例4 第3期 規範③（「創造的」タイプ）の事例「新しいきまり作り」

透明の部品が子ども達に人気があり、その部品を「宝物」と呼んでいる。週の始めにコーナーに入ることが出来た子ども達が、それをたくさん使って独占することが問題であると感じていたので話し合いをした。子ども達から多くの意見が出た。話し合いの結果として、「10数えてというのは、早すぎて難しいから、1日か2日飾ったら他の人が使ってもよいということに決まり、翌日は保育者が部品をもとに戻す」ことにした。

【子どもの変容の背景】

数の少ないブロックを取り合う5歳児の気持ちに共感し、現在の課題について子どもに相談をした。5歳児の意見を充分聴く時間を持ち、課題について考えた。話し合いの中で、問題を解決するために数や時間の知識を使って具体策を提案する5歳児の育ちが見られた。

表1 実践の経過と考察

時期	グループの様子	個人の様子	保育士の願いと関わり	実践の評価および考察
第1期 4月	<p>・新学期にも保育が進級してくると、自由遊びの時間に室内で落ちついて遊べず暴れる子ども達がいることがわかった。何故暴れるのか、その子ども達の状況を振り返り、3歳児のクラスから進級してきたことや、担任の異動等、新学期の環境の変化が主な理由ではないかと考えた。全体で集まった時に話を聞くのが難しいなど、他にも今までにない雰囲気があった。</p> <p>・昨年からの5歳児は誕生まれの子どもの多いこともあって、グループで話す時の声の大きさに関係する約束は理解しているようだが、自分の思い通りにならないと相手を叩くなど、自分の気持ちの表現がまだ上手でない子どもが多々みられる。</p>	<p>・N児:お集まり中おしゃべりをすする姿が見られ、じっと座っておくことが難しいなどの姿が見られる。</p> <p>・K児:室内で静かに遊んでいる子どももいるも椅子からジャンプをしたり、軽いごっこをする姿が見られた。一緒に好きな遊びを見つけたら、今現在のグループにある遊具がK児にとっては少し難しい玩具(バズル等)であるようだ。以前のグループで遊んでいたカルダなどを準備すると「これ、知ってる」と遊びだす姿が見られた。</p>	<p>・まずは新しい環境に慣れ安心感を持って生活できるように子ども達の興味や関心があることは何かを知るように努めた。好きな話を見つけて、継続時間が長くなることで、人の話を集中して聞けることも、つながると考えた。</p> <p>・一人ひとりが落ち着いて遊ぶためには、以前グループで喜んで遊んでいた遊具を設置した。室内空間をもう少し狭く区切った環境を準備することを考えた。また、そのことを子どもにも伝え期待を持って約束を守ろうという意識につなげるようにした。子ども達だけでは、まだ8人ぐらゐのグループで遊ぶことは難しいので、4.5人のグループで遊べるような環境構成が大切と考えた。</p>	<p>・子どもが落ち着かない状況について、その原因を考えた結果、新しい保育室においてある素材や玩具への子どもの関心がないことがあげられた。</p> <p>このことから、今後新学期には2.3歳児保育室の玩具を、準備しておく必要があると考える。</p>
5月 13日	<p>・部屋の環境が変わり、工作コーナーやレゴブロックコーナーができた。子ども達は昨日から準備してあったレゴで遊べることを喜んでいて、朝から嬉しそうにコーナーを眺めていた。レゴコーナーは大人気で、自由遊びが始まった途端に、コーナーへ駆けつけていく子どもが多かった。話し合っていて決まろうと話し合っても遊びたい気持ちが先に出てしまふ、コーナーに子ども達があふれていた。</p> <p>・しゃんけんで入れる人を決めることに決定したが、そう決まっても負けて悔しそうな表情の子どももいてはばちの間、仕切りの隙間等からコーナーの様子を覗く子どももいた。</p>	<p>・お集まり時に、「入れるのは3人までにしてよう。どうやって3人決める?」と問いかけると、S「座り方がかっこいい人」、T「しゃんけん」、G「足が速い人がいい。」など、子ども達は自分の考えを色々と言っていた。</p> <p>・G:コーナーに入れないと、隣にある積み木コーナーからずっと遊んでいる姿を傍観した。作っている友達作品を「そんなのかっこ悪い」と言うなど、意地悪を言うことで悔しさを表現する姿が見られた。</p>	<p>レゴコーナーでは約束を守りながら遊ぶ意識と一人ひとりが遊びに集中出来る空間を作りたいと考えたので、柵や柵を使い小さなスペースを作るようにした。保育士が入り確認し「3人」までで遊ぶようにした。保育士が「作っ定員数ではとて遊ぶようにします」と無理のないたものは柵の上に飾りましょう」という約束を入りに表示した。(図範①-1)</p> <p>・約束を守ろうとする意識を育てるためには、子ども達も一緒にルールを考えることが大切と思ひ、ルールを考える時を持てた。始めは自分と都合のいいルールを考え意見を出さず子どもが多かったが、T児が「ケイトンのときみたいにい、しゃんけん決めて決まるとい」と戸外で出したので、他の子どもも納得しその意見を決まった。(図範②-1)</p>	<p>・保育士が、集団の約束を守りながら遊ぶ意識を育てるような関わりをしつつ、一人ひとりの子どもが遊びに集中できる空間を保障するという2つの視点が、子どもの規範意識を育てるためには必要だと考えた。</p> <p>・話し合いの順序として「何人まで入ることができるか」を問いかける。これはレゴの重が決め手になるため、保育士が提案したことがよかった。</p> <p>・しゃんけん決めて決めることを提案したT児は、昨年までしゃんけんで負けることがありや、しゃんけんをしたがらない子どももいた。しゃんけんに対して理解が進み、受け入れるようになってきた。</p>

<p>第2期 5月 下旬</p>	<p>・朝の好きな遊びの時、子ども達が遊んでいる様子を見てみると、3人入っても余裕がある空間になっていた。</p>	<p>「今日も遊ばう」と急いでコーナーへ向かったG児。入っている友達の数を見、「1、2、3、4…」と数えると、自分が5人目だと気づき、入り口をそっと開け、我慢していた。</p>	<p>「もう一人入っても大丈夫かな?と問いかけがみていると5人入られる。まだ遊べるよ」と答えて帰ってきたので、4人までと人数の約束を変更することにした。(規範②-2)</p> <p>・G児は自分の思い通りにならないと、手が出たり、悔しさを相手に嫌がるような言葉で表現したりする姿が今までは見られていた。自分から約束を守った瞬間を他グループのF保育士がちょうど見ており「一言声をかけよう」と一言声をかけた。そうしたこと、レゴコーナーでの態度が少しずつ変わりはじめた。(規範②-3)</p>	<p>・遊んでいるうちに、もう一人入れる空間になったのはなぜかということについて、子どもに意識させることも大切ではなかったかと考える。その原因を話し合うことにより、子ども達が共有の遊び空間を使う際のきまりについて、理解を深めることができたのではないだろうか。</p> <p>・担当保育士だけでなく、他のグループのF保育士がちょうど見ており、G児に一言声をかけて認めたことにより、G児だけでなく他の子どもも態度も変化したと考えられる。この保育場面では保育士同士の連携が生かされた。</p>
<p>6月 月上旬 (6/6)</p>	<p>・レゴで遊ぶことが楽しく、4人で遊ぶ約束は守れているが、毎日変わらないメンバーで遊ぶ姿が見られる。早く入ってしまうば遊べないような雰囲気になかなかなくなってきた。</p>	<p>・子ども達と話し合う時を持った。毎日レゴで使える人もいるけど、「入りたい」と思う時に4人いつも入って使えない人もいることを話し、どうやってみんなが使えるかを考えを出した。「ゆっくり入るように入る」という意見が出た。Sくんが「交代で入るよ」という意見が出た。名前を書いたカードで「入った人の名前を書こう」とし、名前を書いたカードで「入った人の名前は2回目には入れない」というルールを決めた。始めは「えーっ」とR君など数名の年長児が嫌そうな表情を見せていた。保育士が、友達と交代して遊ぶために我慢をすることも必要だと話すと、気持ちを切り替えて納得した様子が見られた。</p>	<p>・子ども達の遊ぶ様子を見てみると、じゃんけんで決めることは平等だが、遊びたいと思う時間に差があり、難しいことを感じていた。保育士間では入れる人数は週のうち限られているため、入れる子が増えるよう「週のうち2回まで」などの決まりを加えたほうが良いのではと話していた。子ども達の話し合いの場で「交代」という言葉が出てきたので、保育士がそれを取り上げ「週間で2回まで」という交代のルールを具体的に示すと、子ども達も賛成し、やってみることにした。(規範②-4)</p> <p>・1週間という言葉を導入してきた5歳児には今まであまり使っていなかった。1週間という言葉より2回という約束が子ども達に目にもみえてくれた方がよいと保育者間で話し合った結果このようなきまりにした。</p> <p>・新しいルールが出来たことで遊べる回数が増えることに不満を持つ子どももいた。しかし、自分のことだけでなく、友達のことを考える機会にもなると思い、保育士が子どもに前向きに考えられるよう励ましの言葉をかけるようにした。(規範②-5)</p>	<p>・すばやくレゴコーナーに行く子どももあれば行かない子どももいるなど、思いがあっても行動の仕方に個人差があることに気づき、「1週間で2回まで」という交代のルールを、保育士が提案したことは、一つのルール作りのモデルを示すことになったと考える。</p> <p>・子どもがルールを守った場面を、保育士が認めることで、忍耐力を育てるための援助になる</p>

(6/7)	<p>・保育士が、今日入った子ども達の名前を記入していると、コーナーに入らうとしていたG君(年長児)が「俺は今日は入らないで明日入るから、うさぎさん(年中)の誰か入っていいよ」と外で待っている年中児に話っていた。</p>	<p>・1週間という概念をまだ理解していない子どもも多くいたため、コーナーに1週間の表を貼り、遊んだ子どもの名前を毎日書き、見て確認できるようにした。(規範②-6)</p> <p>・明確なルールを子ども達と決めることで、子ども達が主体的に考えて遊ぶようになるのだと感じた。</p>	<p>・子どもが1週間の概念を理解していないことを的確に読み取り、すぐに対応し環境構成で援助している点が、きまりを守ることを継続させることとなったと考ええる。</p> <p>・この環境構成により、子どもが1週間の期間を意識し、主体的に遊びの計画を立てることができるようになった。そのため、自分の遊ぶ時間が保障されていることが理解できた。また、保育士が友達に譲ることを要求しても容易に受け入れることができるようになってきたと考える。</p>	<p>・子どもが1週間の概念を理解していないことを的確に読み取り、すぐに対応し環境構成で援助している点が、きまりを守ることを継続させることとなったと考ええる。</p> <p>・この環境構成により、子どもが1週間の期間を意識し、主体的に遊びの計画を立てることができるようになった。そのため、自分の遊ぶ時間が保障されていることが理解できた。また、保育士が友達に譲ることを要求しても容易に受け入れることができるようになってきたと考える。</p>
6月 中旬	<p>・レゴでの遊び方や約束がわかり落ち着いていくと、コーナーに入れる定員に人数が達していないこともあった。約束をしっかりと守ろうとして、入りたい気持ちを抑えている子どもの姿がみられた。</p>	<p>・レゴコーナーで遊ぶ子どもがほとんどいなくなった。K君は「レゴコーナーで誰も遊んでないよ。」と保育士に度々報告しに来ることから、遊びたい気持ちが見え隠れしていた。保育士が「遊んでいいんじゃない?」と言うが、K君は週1回入れる約束をおぼえており、「もう入ってるもん。」とぼそつと答えていた。</p>	<p>・きつちりと約束を守る気持ちも大切だが、保育士には柔軟な姿勢も必要ではないのではと考えた。「約束の人数に達していない時は、2人入った人でも入ってよいことだし、次の人が来たらその人は必ず交代すること」を個別に話すようにした。(規範①-2)子どもが自分からコーナーを出ることはまだ難しく、保育士が時々様子を見て声をかけるようにした。</p>	<p>・2か月ほど立つと、レゴコーナーに子どもが入れるゆとりがあることに保育士は気づいた。しかし、子ども達は約束があるので入れない状態にあり、不自然さを感じていた。そこでルールに縛られるのではなく、有効な活用を柔軟に取り入れるように提案した。ここでは「名前をかきくことで子どもが共通理解できるので、交代で使用するというルールがくずれることがない」と保育士は判断した。ルールは何のために存在するかという基本を大切にしたい保育士の判断であったと考ええる。</p>
6月 下旬	<p>・子ども達は見本を見ながら共同(3,4人)で城や飛行機などの面白い作品を作ることができるようになってきたため、保育士はいつまで作品を飾り続けるべきか迷っていた。</p>	<p>・作品を飾る程度まで飾って片付けるようにはしていたが、子ども達が「もう壊すの?」と残念がる姿などが見られ、グループ担当の保育士だけが答えが出ず、お昼の全職員ミーティングで話をだしてみた。そこで、家庭で遊ぶ時とは違う「集団」での約束を知ることが大切だという結論になり、部品は一人の子どもだけのものではないことを理解させ、1週間飾って片付ける約束を作ることになった。(規範①-3)一生懸命作ったものを壊すのではなく、必ず写真に撮り、コーナーに表示することとで、子どもが満足感を持つようになるようにも工夫した。</p>	<p>・作品を飾る期間は、子どもによって満足度に個人差があると考え、飾り棚にネームプレートをおいて、自分の作品を自分で飾るようにしたのは、子どもの主体性を大切にしたいと考えている。また、1週間という期間を設けたことが、子どもによって守ることが難しいルールであると考え、「一生懸命作ったものを壊した」というとらえ方を子どもが示さないために、必ず写真に撮り、コーナーに表示することで子どもの思いを満足させた。このような配慮は、子どもの集団のきまりを守ろうという意識を高めさせ、ひいては保育士との信頼関係を強めることにもなると考える。</p>	<p>・作品を飾る期間は、子どもによって満足度に個人差があると考え、飾り棚にネームプレートをおいて、自分の作品を自分で飾るようにしたのは、子どもの主体性を大切にしたいと考えている。また、1週間という期間を設けたことが、子どもによって守ることが難しいルールであると考え、「一生懸命作ったものを壊した」というとらえ方を子どもが示さないために、必ず写真に撮り、コーナーに表示することで子どもの思いを満足させた。このような配慮は、子どもの集団のきまりを守ろうという意識を高めさせ、ひいては保育士との信頼関係を強めることにもなると考える。</p>

<p>7月 上旬 ～ 8月</p>	<p>・展示した作品や他児が作りかけの作品の部品を使用して、子ども達の遊ぶ姿が見られるようになった。しかし、他児の作品に手を加えることで「僕のを取った!」など、本人がいらない中で部品の取り合いが見られ始める。特に、透明の部品は人気があり、子ども達から「宝物」と呼ばれ週の初めに入った子ども達が始めて占してしまう傾向にあった。</p>	<p>・R児「先生IG君が、僕が作ったやつを勝手に取ってる!」 G児「取ってない!」 保育士「R君は先に入れて『宝物』をいっぱい集めたんだね」 R児「そうだよ。僕のだよ!」 保育士「G君も使いたかった?」 G児「だって全部ないもん!」 そして黙って部品を投げてすべて去って行った。R児は2回コーナーに入り、すでに入れない状態の時に、G児にR児が大切にレゴで作った宝箱の中から「宝物」の透明のレゴをこっそりと取ってしまったようだった。</p>	<p>・子ども達が好きな「宝物」と呼ばれているパーツや車のパーツなどは子どもの人数に対しては少ない。けれど、集団の中で使う以上は交代で使うことで相手に譲る気持ちが出てくると保育士間で話し合った。このような場合は、保育士が間に入り、お互いの話をよく聞くようにした。</p>	<p>・数の少ないブロックを使いたい子どもの気持ちに共感することは必要であった。しかし、あえて保育士がすぐにルールを作るという結論を出さず、子ども達にたくさん意見を出させ、主体的に問題を解決しようとする意識を持たせたことはよかったですと考える。</p>
<p>第3期 9月 ～ 10月</p>	<p>・作った作品の写真をコーナー内に展示するようにし、その写真を見ながら他児の作品を真似て作る子どももいるなど、技術面でも刺激し合っている。 ・コーナーでの遊びが楽しく、毎週2回必ず入る子どももいる。 ・一部の子ども達の中では、使いたい部品があることを相手に伝え、友だちとのやり取りの中で貸し借りが出来るようになってきた。子ども達も出てきた。しかし、引き続き出来上がった作品の中から使いたいものを持ってしまおう姿も見られる。</p>	<p>H人:R児が使おうと手に持っている部品を見て「それ、僕も使いたいたんだよ。貸して!」 R児「う～ん、どうしようかな・」 H人「貸してお願い!」 R児「う～ん、いいよ!」</p>	<p>・レゴコーナーで友だちが製作した作品から欲しい部品を取ってしまおうということが以前から時々おこっていた。そこで、子ども達とそのことについて話し合いをする時を持った。週の始めに入ることで来た子ども達が、透明のブロックをたくさん使うことを嫌うことが問題となっていた。話し合いではと感じていたので、話し合いの初めに入った人たちがたくさん使っているよね」と話し始めた。「それは、ずるい、嫌」という意見が出たので「どうやったら、他の人も使えるようになると思う?」と問いかけると「10数えたら貸したらいい!」とK君、「貸してって言われたら貸すようにする」といいたとR君。その他にも子ども達からたくさん意見が出たが、交代しながら使おうという意見が多く出た。そこで、「10数えてというのは、早すぎて難しいかも!」と「いいから、1日か、2日飾ったら他の人が使ってもいいよ!」と決まらした。その後「提案すると多数決で1回戻したら先生たちも部品をもとに戻す!」ことに決まった。(見直し③-1)また、やってみて不具合が出たらもう一度考えてみたいと思う。</p>	<p>・子どもから、具体的なルールの提案ができるようになってきている。8月に保育士がすぐにルールを提案せずに、子どもも考える時を持ち、子どもが納得のいく結論を出すまで待つことがよかったですと考える。 ・不具合なことが起つたら、その時に子どもと考えあおうとする保育士の姿勢が試行錯誤を肯定的にとらえている。</p>

12月	<p>・保育者に「宝物」が足りないと言っていると訴えてくる子どもはいた。また、その都度自分達で話し合ったり、分け合う姿も見られたので、そのまま子ども達に解決を任せた。</p>		<p>・「1回寝たら先生たちが部品をもとに戻す」ことに決まった。毎日片付けられないこともあり、大変だったので保育者の判断でやめることになった。(規範的①-4)「宝物」(透明レゴ)は引き続き人気であった。</p>	<p>どの時期においても、保育士が必要に応じてきまりを与える必要性があることに気づいた。</p>
1月 ～ 2月	<p>・行事などがあるレゴコーナーに入れないため、入りたい子ども達が集中することがあった。</p>		<p>・もう一度コーナーに入る前にはじゃんけんをすることにした。(規範②-7)</p>	<p>ざりげなく保育者がコーナーの近くにいるようにしたので、徐々に落ち着いてきた。</p>

4. 総合的考察

幼児の規範意識の芽生えについて、3期にわけて考察しまとめとする。

第1期では、保育者が室内空間を柵等で区切り、構成したレゴコーナーに入れる人数と作品の置き場所を決め、遊びのきまりを入口に掲示した。このきまりの説明は、大人が一方的に与える受動的タイプであるが、次第に話し合いが活発化し、同調的タイプを持つ規範②が増加した。

第2期には、5歳児が場を共有し遊ぶことに慣れてきたため、コーナーに入れる定員数を増やすことを保育者が提案した。この時、子ども達に他の子どもを気づかい、場所を共有することがうまくできるようになった自分の行動の変化に気づかせるような援助が必要であったと考える。

その後、5歳児が変更したきまりを、継続して守れるようにきまりを掲示をするという間接的な援助を行ったことは、子どもの主体的な判断力を育てるのに有効な方法であった。また、1週間ごとにコーナーで遊んだ子どもの名前を表に書き込んで掲示したことは、文字を有効に保育環境に活用し、子ども同士のコミュニケーションが活発化することとなった。この園では「保育環境スケール」⁵⁾を用い、3年間保育環境の改善に取り組んできた。今回の研究により、子どもの作品や子どもに関係するものを展示することが、5歳児が主体的にきまりを守ろうとする意識を継続するために効果的であることが明らかになった。

第3期では、子どもの作品を写真にとって展示したことは、子ども自身が製作した成果を自分で確認することができただけでなく、友達の作品からも刺激を受けた。また、友達の作品を大切にしようとする気持ちが育ち、ひいてはものを大切にしようとする意識を育てることにつながった。

また、規範③(「幼児—幼児—保育者」といった3者間の相互作用により生成される「創造的」タイプ)が、10月の「宝物」と呼ばれるレゴの使用の話し合いにおいて見られた。実際には、5歳児が創ったきまりは継続が困難であり、保育者が修正案を提案する援助が必要となった。しかし、5歳児が数や時間の概念を使用し、問題解決をしようとした行為は評価すべきことととらえ、自分達の遊び環境を良くしていこうと子どもの行為を継続的に援助したことが、その状況におけるきまりの習得にとどまらず、他の状況でも問題解決への意欲を示す育ちが観察された。

保育者の援助や手だてを総括すると、保育者が、コーナーを設置した時に子どもの遊び方を様々な視点から予想し、適切な環境構成をすることが、不要な葛藤やいざこざを生むことなく5歳児が仲良く遊ぶためには効果的であることが、検証された。また、きまりを守れない場面を見つけて、5歳児に話し合いを通して主体的に考えさせたことが、子どもの「きまり」の習得を促し、クラス全体の「きまり」としての定着を促したことも明らかになった。つまり、規範①(保育者が一方的に与える「受動的」タイプ)は、特に環境構成の初期段階には必要

であるが、次第に規範②（他者との関わりの中で与え受容される「同調的」タイプ）が増加し、第2期「きまりを理解し守る時期」になって幼児の変容と育ちが見られるようになると、規範③（「創造的」タイプ）の行為が出現した。子どもが提案する新しいきまりは、非現実的なことや問題解決につながらない提案も多かった。しかし、民主的な人格の形成においては、5歳児が遊びや生活の中でおこる課題を、主体的に考え丁寧に話し合う姿勢を保育者が肯定的にとらえ、話し合い活動を援助することは、きまりを守ることを通して、その基盤となる規範意識を育むことにつながると考える。

註

- 1) 平成20年改定「保育所保育指針」厚生労働省
- 2) 平成20年改定「幼稚園教育要領」文部科学省
- 3) 柏まり・田中亨胤「幼稚園児における生活過程から創る「きまり」－「きまり」に関する先行研究の整理による仮説の提示－」2002 『幼年児童教育研究』第14号 兵庫教育大学幼児教育講座幼年児童教育研究編集委員会
- 4) 柏まり・田中亨胤「教師と幼児との関係構築過程における園生活の「きまり」習得－「規範」概念にかかわる先行研究の整理を通して－」2003 『幼年児童教育研究』第15号 『幼年児童教育研究』第14号 兵庫教育大学幼児教育講座幼年児童教育研究編集委員会
- 5) テルマ ハームス デビィクレア リチャード M.クリフォード 埋橋玲子訳『保育環境評価スケール』幼児版（2004）法律文化社 pp.18-19

Children's Process of Learning Playground Rules in Nursery Environments

Yoko SHIMIZU*¹, Reiko INDO*²

*¹Kyushu Women's University Junior College Department of
Childhood Care and Education

*²Kohitsuji Day Nursery

Abstract

This study examined the environmental composition and the way assistance should be given to children as young as 5 years of age while they learn the rules while playing at the Lego corner of "Kohitsuji Day Nursery". Also as they create new rules necessary for playing together.

The environment was analyzed by establishing three norms based on the elements of rules classified by Tanaka. The first norm is based on the "textbook" element or rules given directly by adults. The second norm is founded on the "alliance" element, meaning rules coming naturally from children's association with other children. Finally the third norm is founded on the "creative" element, meaning rules coming from the interaction of all parties involved as an example, "child-child-teacher".

Keywords ; 5 years of age, rules, environment